
春

陸たまき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春

【Nコード】
N5094D

【作者名】
陸たまき

【あらすじ】
戦が終わりに、私は人生を選ばなくなっていた。少し悲しい恋の話。

終わりが来たと、私は思った。

周り中から、人々の関とぎの音が聞こえる。

尚うやうの国が、私の故郷の国の人間が、いよいよここまで攻めてきたのだろう。

私は寝台から腰を上げる。

戦いの最中だというのに、普段どおりのゆるやかな足取りで男が現れた。

青悟せいご。この国、蓮はすの長であり、私の夫である男。

彼は手に短刀を持っていた。

抜き身の鋼が鈍く光る。

ついに、この時が来たのだ。

私の父は、尚の国の長だった。

尚と蓮は友好関係を結んでいた。しかし父は謀にかけては才能があり、蓮の国を得ようとしていた。

けれど、その計が途中で明るみに出た。

父は殺され国土の大半を奪われ、私は人質として青悟の妻になった。

あれから2年…。

けれど尚の国の民達は、再び戦を起こした。

私という存在は、もはや人質としての価値はないのだ。

「私を殺すんですね」

「……………」

青悟は黙って私を見ると、

「来い」

そう言って歩き出した。

訳がわからずも、私はその後について行く。

長の間に入り、私は足を止めた。広間の中央に立つ男には見覚えがあった。

今は尚の国の長となったその男。

かつてのいいなずけ。私が唯一愛した人。

「偉高^{いたか}……」

国での遊び仲間だった彼は、私を認めるとかすかに目を開いた。

青悟は戦に負けたのだ ……私はぼんやりと悟った。

戦の最中にも関わらず、ここにこうして敵国の長がいるとはそういう事だ。

「…では、行きましようか」
偉高が言って歩き出す。

おそらくこれから、青悟は民の前で首を刎ねられる。多分私も一緒に。

でも、偉高に殺されるならいい。

「偉高殿」

不意に青悟が偉高を呼び止めた。

「彼女は生かしてやってくれないか」

私は目を丸くして青悟を見上げた。彼は静かな表情で偉高を見つめている。

偉高がゆっくりと振り向いた。

「…どういう事ですか？」

「妻と言っても、手を触れたことすらない。そちらの国でやり直せるだろう」

「本当…に？」

目を丸くして、偉高が私を見る。しかし私は答えられず、ただただ青悟を見るばかりだ。

「…何故」

青悟がゆっくりと視線を向けた。

「俺のせいで死ぬ人間を、これ以上増やしたくない」

「そんなの…！」

「父を殺しておいて何を今更、とでも？」

「……」

「わかりました」

偉高が割って入った。

「青悟殿のいう事を信じましょう。春波^{はるなみ}は殺さない。住まいを与え、

ちゃんとした暮らしをさせます」

「有難い」

「……………」

何故。

「何故っ！！」

私を一瞥し、青悟は視線を落とした。

「お前は一度でも、私の妻であつた事があるか」

「え……………」

「お前の心は常に、尚の国と偉高殿の元にあつた。違つか？」

「……………」

違わなかった。けれど。

「今絶やされるべきは私の血。この国の長の血だ。しかしお前は私の子供を身籠っている訳でもない」

「…違う」

聞きたいのはそんな事じゃなくて。

「何故私を生かすの」

青悟はふつと、口元に笑みを浮かべた。

「最後の悪あがきさ。お前の心に、一生消える事のない闇として居座ってやるという…な」

広間の中央に座り込んで、どれくらいそうしていたかわからない。人々の喧騒もここまでは届かない。

床の鳴る音に顔を上げれば、偉高がいた。刀や胸当ては取り払っている。

青悟の処刑は、もう終わったのだ。

「春波」

偉高は入り口で立ち止まった。

「…どうする？」

聞かれた意味がわからず、私はぼんやりと偉高を見上げた。
彼は悲しそうに目を伏せる。

「愛する男の後を追う？」

愛する男…。

「っ、違う。愛してなんかないわ！」

私が愛しているのは偉高だけ。尚の国だけだ。

なのに…

こんなに悲しいのは何故だろう。

床に両手をついて頭を振る私の前に、偉高が膝をついた。

「なら…尚の国へ、戻ってくるか？」

両目から涙が溢れ出した。

もう自分の感情がわからない。何故すぐに頷けないのだろう。

「春波…」

偉高の声が降ってくる。

「彼がお前を生かしたのは…春波を愛していたからだ」

私はその場に固まった。

しばらくして、偉高が無言で立ち上がる。

「どこに行くの？」

心細くなつてそう尋ねると、偉高はすつと目をそらした。

「宴の最中なんだ。…また来る」

恨んでいた、はずだったのに。

館をどこへ行くともなく歩き回りながら、私はぼんやり考える。

恨んでいたのだ、確かに。

でも今は、死んで当然などとは思えなかった。

愛していたからではない。

だって青悟の事などほとんど知らない。ろくに会話もしなかった。

答えはとつくに決まっている。

私は尚の国へ帰る。

愛する土地へ、愛した人々がいる場所へ、帰りたい。

彼の最後の優しさを利用して、望みを叶える自分が醜いと思った。

彼の後を追って死ねたら綺麗だろうに。

「……偉高」

いつのまにか私は広間へ戻ってきたらしい。入り口には偉高が立ちつくしていた。

偉高は私の姿を認めると、ほっとしたように息を吐いた。けれどもすぐにその表情は無に変わる。

「決めたか？」

「……………」

私は偉高の腰の短剣に目をやった。

ふと、青悟の言葉が脳裏をよぎる。

一生消えない心の闇。永遠の居場所。

それは甘い誘惑だった。

偉高になら殺されてもいい。偉高は一生私を忘れない…。

ああそうか。

私はようやく気がついて、また少し悲しくなった。

青悟は本当に、私を愛してくれていた。一度も触れ合わなかったけれど。語り合う事もなかったけれど。

（俺を、忘れるな）

青悟の最後の言葉。

ぽつりと涙が落ちる。最後の、たったひとつの青悟への手向けだ。

「私は…帰りたい」

「先生、書けましたっ！」

「うん、上手」

私は朱い筆で半紙に丸を書いた。緊張した面持ちで座っていた女の子が、満面に笑みを浮かべてくれる。

「次はこれを書いてみようか。何て書いてあるでしょう？」

「はな、と書かれた半紙を示す。女の子は首をひねった。」

「えと…は、な？あ、お花だ！」

「当たり前」

女の子は半紙を奪い取るようにして、自分の場所へと戻って行った。

ここはお寺だ。

戦で親を失った子供たちが、門主様に引き取られて育てられている。

尚の国へ戻ってから、私はここで読み書きを教えさせてもらうことになった。偉高が見つ付けてくれた私の居場所だ。

「春波さん」

「はい」

奥のふすまが開いて、門主様が顔を出した。

「偉高殿がお見えですよ。ここは私に任せて、行っておあげなさい」

「あ、ありがとうございます」

慌てて立ち上がり、私は駆け足で庭へと向かう。

縁側に腰を降ろして、庭で遊ぶ子供達を楽しげに見つめる偉高の姿があった。

尚の国へ戻ってから、偉高はこうしてよく様子を見に来てくれる。青悟の国を落としたと言っても、住民との争いはまだあって、平和になったとは言えない。それでも偉高の足が途切れる事はなかった。

「偉高」

名を呼ぶと、偉高はまぶしそうに顔を上げた。私の姿を認め、軽く目を見開く。

「珍しい格好…」

私は薄い桃色の着物を着ていた。昨日までは、黒や灰色を着ていたのだ。

「喪が明けたから」

もう顔もよく思い出せない。けれど私がここにいるのは青悟のおかげだったから、ちゃんと喪に服したかったのだ。

言いながら、くると回って見せる。偉高は笑って、似合っていると言った。

「…そうか。もうそんなに経ったのか…」
偉高の隣に座って、遊ぶ子供たちを見る。
「うん…」

かくれんぼをしているらしい。一人の子が数を数え始め、他の子が庭に散らばった。

どちらからともなく手を重ねる。

目を合わせると、偉高は照れくさそうに微笑んだ。
私も微笑み返し、そのまま周りを見回す。

懐かしい山並み。故郷の風。香り。大切な、愛している人。

ごめんね青悟。ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5094d/>

春

2010年12月22日02時07分発行